

音楽療法の視点を生かした授業作りについて

～一人一人が自己肯定感を高め、生き生きと活躍出来る音楽の授業～

香川県立香川丸亀養護学校
教諭 三好 菜穂子

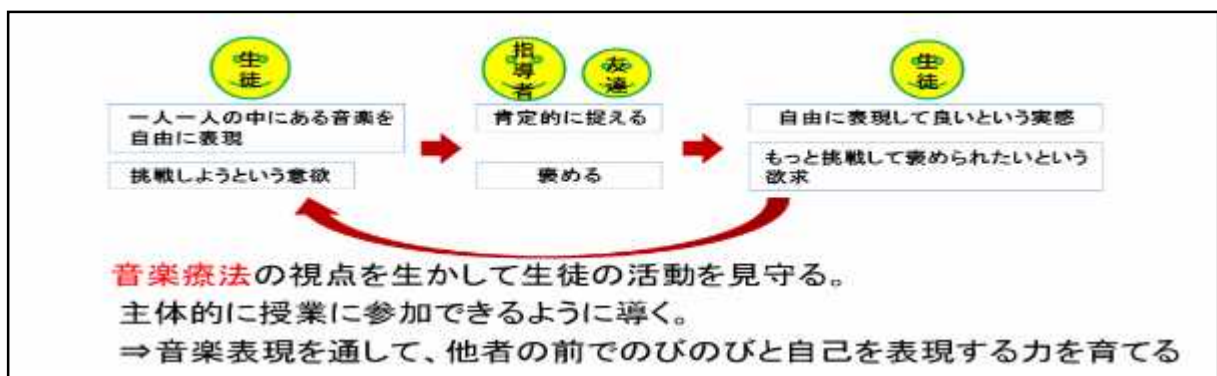
1 はじめに

今、社会はコロナ禍の影響で様々な変化を強いられ、教育現場もICT機器を用いた多様な学びのスタイルが生まれた。一方で、やはり学校は、教師と児童生徒、児童生徒同士の直接的な関わり合い、体験する場として「集う」ことに特に存在意義があるという点を再認識した。その大切な学びの場で、音楽療法の視点を生かした音楽の授業により、集団の中で社会性を養いながら、個に焦点を当てられるような場面を多く設定したいと考えた。また、様々な理由から自己肯定感を持ちにくい児童生徒たちが、自分の想いや願いをのびのびと表出できるようになるためにはどのような支援、手立てをすることが必要なのかを模索した。

2 実践の内容・方法

(1) 課題設定の理由

本校の在籍者数は年々増加の傾向を辿り、現在私が所属する中学部2年は、男子16名、女子14名の計30名で構成されている。この人数は本校中学部で最も多い人数である。その内訳は、本校小学部からの生徒が10名、市町立の小学校から本校へ進学してきた生徒がその倍の20名である。後者の生徒達が地域の中学校ではなく本校を希望した背景には、小学校時代にいじめにあったり、自分の良さを存分に発揮できずに過ごしてきたりしたことが生徒との何気ない会話の中からうかがい知ることができる。自己肯定感が低く、何事にも自信がなく消極的な姿や、色々な思いはあるものの、それらを上手に他者に伝えることが難しい生徒も多いと感じていた。そこで、音楽の授業に音楽療法の視点を取り入れ、生徒の実態及び一人一人の学習のねらいに合わせた音や音楽を意図的・効果的に使用し、主体的で対話的な学びを目指して授業の内容を組み立て、一人一人が積極的に授業に参加できるようにすることを課題として実践した。〈資料1〉



〈資料1 支援のポイント〉

(2) 授業の流れの提示・構造化

30名の生徒と指導者5名、筆者がメインティーチャーとして行っている授業では、毎回の学習活動の大まかな流れを統一し、授業の初めに本時の流れを掲示物やプレゼンテーションソフトを用いて提示し〈資料2〉、合わせて目標を伝えてスタートする。プログラム内容は、毎回決まった挨拶の歌に始まり、その後即興によるリズム活動、器楽、歌唱などを行った。授業後には教員間で振り返りをし、情報端

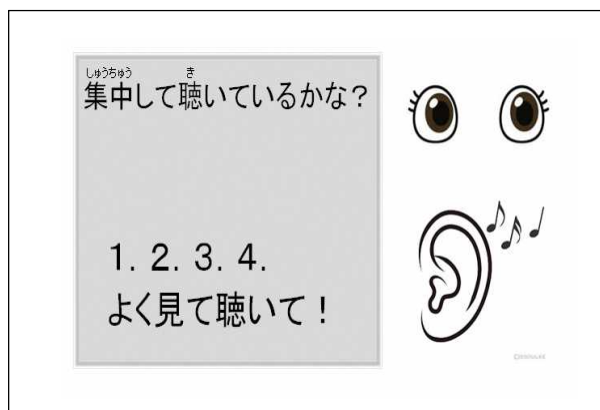


末に記録した動画や写真を見て生徒の変容を観察しながら気づきを共有したり、次時の内容を検討したりしながら進めた。

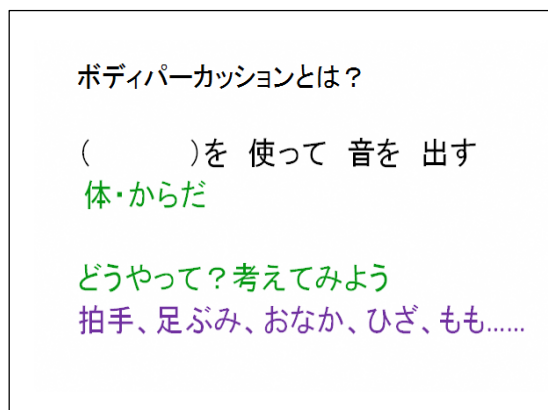
〈資料2 授業の流れを示した掲示物とプレゼンテーションソフト〉

(3) 主体的なリズム発表

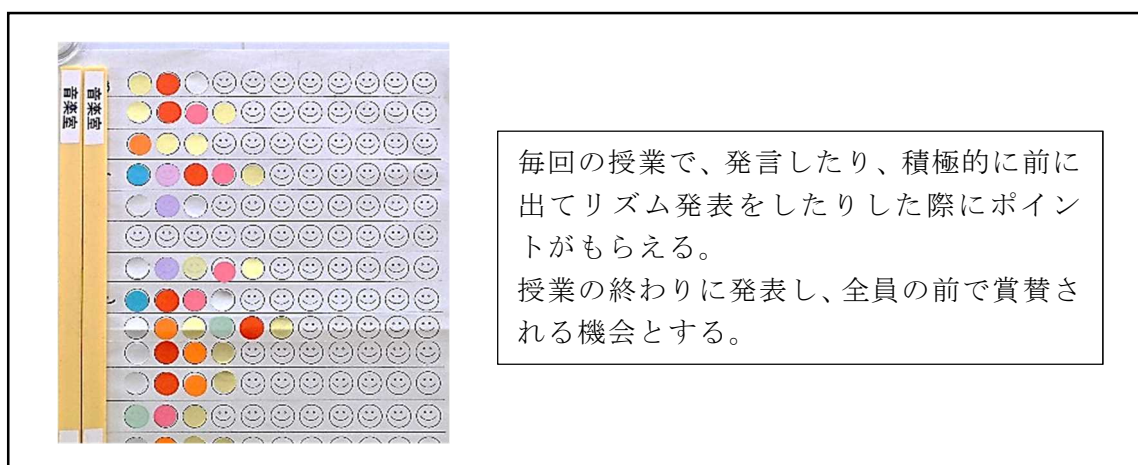
週2回、45分の授業時間内の約10分間を即興によるリズム演奏の時間に設定し、生徒の作る音楽を尊重し、極力そのままの形で全員で模倣することにより、自発的な音楽表現を促すことと、同時に他者から認められることで自己肯定感を高められるようにした。指導者が手本を見せた後、希望者が前に出て自分のオリジナルのリズムを発表し、全員でそのリズムを模倣した。その際に合図となる掛け声として「いち、に、さん、し、よく見て聴いて。」〈資料3〉と全員で復唱してからリズムを聴取した。このように始めることで、発表する生徒は出だしのタイミングを安心して掴むことができ、聴き取る側の生徒は初めの音に集中することができた。また、この掛け声の速さで演奏される速度をある程度意識的に揃えることが可能になった。30人で速度を合わせてリズムを奏でることは後に器楽合奏に取り組む際にも同じ速度を意識することに効果的であった。このリズム模倣の場面で音楽療法の視点を取り入れて実践した。具体的には、「どのような表現でも大丈夫である。」という視点であり、それを生徒に明確に伝え、実際に行った。〈資料4〉「30人の前が出る」ということが課題である生徒には、自席や自分の好んでいる場所での発表という形も認めた。生徒が自ら自分の中にある音楽を引き出し、発表するためには、まず「発表したい」という気持ちになることが大切であり、その気持ちのハードルは思いのほか高い。それを乗り越えるにはきっかけが必要であり、このリズム活動の成功体験によって記憶を塗り替えることができる。前述のように、人前に出て自己を表現する体験を肯定的な感情として捉えている生徒はどちらかといえば少なく、中にはそのネガティブな感情が強く残っている生徒もいる。そのためこの発表の場面における失敗は許されない。生徒の奏でる音に寄り添い、その良さを言葉で伝えることで、生徒が自信をもてるきっかけになるように意識的に言葉掛けをするようにした。〈資料5〉生徒は指導者の手本の通りに主に手拍子で表現したり、身体全体でジャンプしたり、ステップを踏んだりと様々な表現方法で発表した。四分音符8拍分という短い時間ではあるが、個々のもつ力で自由な発表ができ、またそれを模倣することで、生徒全員でその音楽を共感することができた。



〈資料3 リズム演奏 掲示物〉



〈資料4 リズム演奏のルール〉



〈資料5 意欲を高めるためのポイント表〉

3 実践の成果

毎回必ず、リズムの即興的な演奏を取り入れて音楽への興味、関心を高め、音への集中力の向上を試み、発表する楽しさを味わえるように導いたことで、次第に多くの生徒が自発的に挙手してこの活動に取り組むようになり、前に出た友達の音や行動に集中して聴く態度も見られるようになった。前に出た生徒はまず、オリジナルのリズムを演奏し、全員による模倣をする。その後、友達や指導者が拍手したり、賞賛の言葉を掛けたりすると、とても嬉しそうに達成感を得られたような笑顔で自席へ戻ることができた。自己肯定感が高まった瞬間である。生徒は他者からの受容による安心感や音楽活動を通して他者とのやりとりができる喜びを感じとれるようになり、より主体的に生き生きと音楽活動に参加する姿勢が身に付いたと思われる。

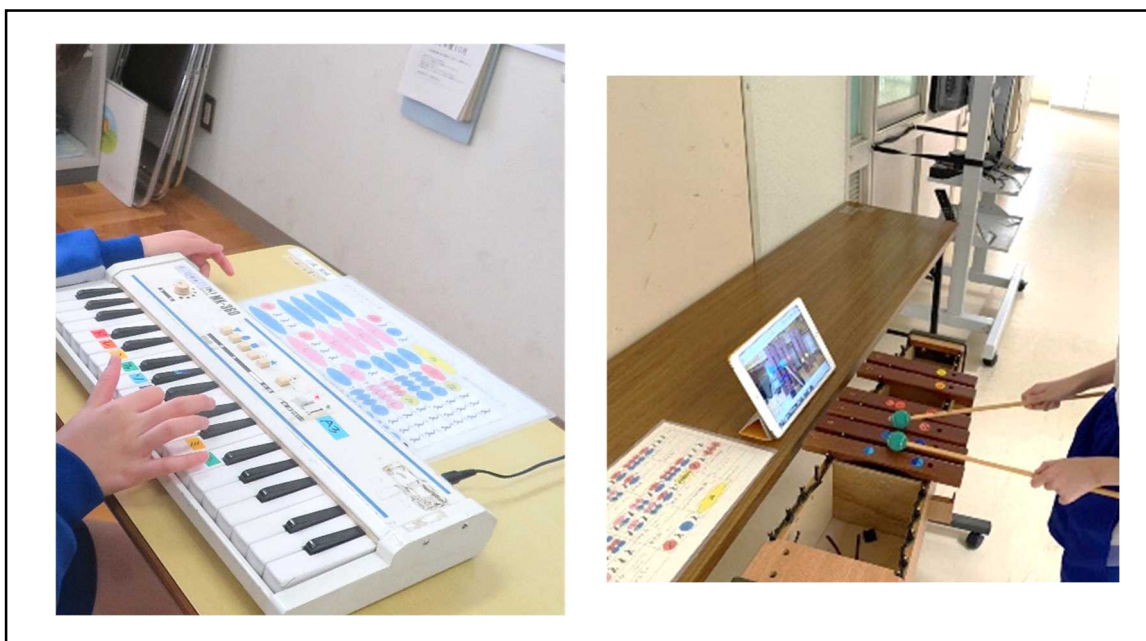
また、リズムの発表に主体的に取り組む姿勢が見られるようになったことをきっかけにして、他の活動にも自主的に取り組もうとする姿勢が見られるようになった。本校では、毎年12月にある丸養まつりで中学部の生徒は器楽、合唱の音楽発表を行っているが、本番に向けての器楽の取組でも、積極的に練習する姿が見られた。情報端末を用いて指導者の模範演奏を頼りに自主練習〈資料6〉をしたり、自分の練習している様子を確認したり、昼休みに毎日練習をするなどの姿が見られた。

生徒への授業アンケートより（1月19日実施）（1名欠席）

| | |
|---------------------------------|---------|
| ・前に出てリズムをするのは楽しい | 22人/29人 |
| ・以前より積極的に前に出てリズムをすることができるようになった | 15人/29人 |
| ・以前より前向きにチャレンジできるようになった | 16人/29人 |
| ・ポイント表はあったほうがよい | 17人/29人 |
| ・テレビ画面での説明はわかりやすい | 22人/29人 |
| ・歌詞や写真での説明はあったほうがよい | 23人/29人 |

4 普及させたい取組と期待される効果

どのようなリズムや動きでも否定せず、まずは生徒の奏でる音に寄り添い、その音楽を受容することで、生徒が音楽を通して主体的にやりとりをし、コミュニケーション能力をさらに高められるようにしたい。今後は指導者とのやりとりから他の友達とのやりとりへと更に関わりが広がり、音楽の授業で身に付けたコミュニケーション能力や集中力を他の授業や学校生活全般において汎化できることが期待できる。



〈資料6 自主練習に取り組む様子〉

5 課題及び今後の取組の方向

授業を受けている人数が多いので、毎回全員の生徒との関わりを持つことが難しい。筆者一人で授業を進められるわけではなく、指導者同士の意思疎通を丁寧に図りながら同じ視点をもって生徒を導いていけるように心がけたい。また記録を忘れてはならず継続して取ることで生徒の変容を見逃さず、全ての生徒に偏りなく、発問したり評価したりできるように準備し、振り返りをするのが大切である。アンケートの結果からはリズムの学習を楽しんでいるものの、まだ自信をもって人前で演奏することには抵抗を感じている生徒がいるので、引き続き同様に取り組む中で更に音楽を表現する喜びを感じてもらえるような工夫が欠かせない。将来自分で音楽を楽しむ、生活を豊かにするための大切な学びを生徒とともに目指していきたい。